

河(Oxus)の上流域と密接なる關係を有するに似たり。

一九〇六年五月ヤールクン(Yarkun)河を流れて沿ひて湖り、ワカン(Wakhan)の谷及びバミールの連山の方向に進む。ムリコ(Muriko)谷なるチャルン(Charrun)の山里に達するや一大磐石に刻銘のあるものを發見せり。就いて調査するに、西曆六世紀乃至八世紀當時のブラーミ(Brahmi)文字を以つて印度語を書きたる下に單簡なる銘と佛寺塔とが刻されて、いと鮮明なり。土人の語る所によれば、こは既に八年前その附近の土中より偶然に發掘せられたるもの、爾來土民は神聖視して、偉力の神と呼び齋き祀り、小祠を構へて之を保存す。傳へ云ふ此の界限はもと神の天降りし處にて、その一旦姿をかくし給ひてより、磐石そのかたみとして現れ、殊に之に刻文の存するものの發見につれて、神聖視せらるゝに至りしものなりと。

ムリコ(Murikos)の幽境に於ける傳説は、大略以上如し。此の傳説は予の探檢以前に於いて既に久しく存在せしものなりや否やは、固より確保しがたし。されどその地質は沖積層に屬して、既に久しく土民の耕作に適せるもの、而して舊來の印度佛教の信念を忘却して、既に此の三百年以來はモハメッド教を信仰するの徒とはなれり。されば今日傳道教師が古代佛教の餘習を之に追求せんと欲するならば、必ずや失望すべく、かくて此の幽境は唯佛教に就いては、單に考古學の研究資料を得るのみに止まるべし。

(後藤朝太郎)

滿洲獻文小論

グレベンシッチコフ述

A Short Remark upon the Type of Manchurian

Literature. By A. W. Grebenshtchikoff, Vladimirskor, 1909. (Russ.)

滿洲人の状況を調査したならば、廣意の人類學に豊富な材料を供給し得ると信ずる。

滿人(滿洲人を略してかく唱ふ、以下之に従ふ)は滿洲の北部と東北部に住して、シナ人に包圍せられ、しかも、之に同化せられず、其の固有の言語、宗教的儀禮(シアマニズム)或は、特殊なる習慣を保有してゐるのは、此種族の研究に少なからぬ興味を持たしむる所以と考ふる。

滿人研究の價値は上述の通りであつて、研究資料の豊富でない現今の事情は、彼等の生活狀態殊に言語上の資料を出來得る限り神速に拾集するの要ありと信ずる。(中略)

故に余は彼等の文化の程度を指示する方面の資料で、今日までまだ誰にも手をつけられた事のない點

を研究して、短かいながらも、滿人の状態を世間に紹介することにした。

て自分の材料を蒐集した地方は、黑龍江省と吉林省の一部で足を此地方に入るゝ前、余は多少豫察してゐた事がある、即ち、現に「生存する」滿人に遭遇するか、又は「天下」を併呑した者は、既に滅亡したのであるかといふ、二つの中の何れが事實であるかといふ問題を持つてゐたが、研究の實際から云ふと文獻の性質上の研究は、いまだ出來上らず、唯外部の輪廓について、おぼろげながら、明らかな考を持ち得たばかりで、其の程度は滿人間に生活して、直接取調べたといふに過ぎんのと同等である。

所謂支那學者なるものの多數は、滿人及滿洲語を既に消滅した者の様に云ふてゐる、即ち、ザハロフ教授は、三十年前に此考を、其の滿洲語字彙の序文の中に述べて「滿洲語は、嘗て之に由りて談話し、書記したりし國民の唇より、今日は全く忘却せられて

殆んど死語とともぬ云々(序文第三十頁)といふてゐられるが、現在の状態と比較すると、殆んど事實に合はぬ、尙ほ、ド、ラ、ブリュニエル氏は、「滿洲語は、滿洲に於て纔かに魚皮韃子族間に用ひらるるのみにして、死語に近し」(ブッセ氏アムル地方研究資料所載、一八四五年、ド、ラ、ブリュニエル書簡第四四頁)と云ふてゐる。(三姓地方の商人は、瓦爾哈人を其の外貌に因りて、長髮子と魚皮韃子との二つに區別してゐる)此等の記事があつてから、随分長年月を経過したが、其の間滿洲語は、依然として、生存し、新しい文獻が現はれる、日用語楛梯として重刻清文虚字指南編(光緒二十年の序文あり)清文總彙が出版せられ、古書は複寫せられ、歌謠は類聚せらるゝ、公文書、照會文、指令書、日用の往復文など絶えず滿洲文で書かれてゐる。(東北滿洲及び蒙古の一部で現に此風があり、自分の手許に蒙古人が、滿洲語で書いた書面がある)

尙、此外に近時設置せられた學校、(例へば齊々哈爾市)には、支那語を滿洲語に反譯する通譯官が居り滿洲文字を彫刻する版木屋があり、印刷所も置いてある、其の一例として擧ぐべきことは、滿洲語で書いた地理、歴史、物理化學などの書籍が可なり多いことである。

一八九〇年北滿洲を旅行した、イワノフ教授は、「二三の學者此語を死語なりとすれども、北滿洲大部の住民は、依然此國語を日用しつゝ、あるを知れり云々」と説いて、世人の誤謬を指摘せられた。(イワノフ氏著マンチュリカ第五頁、註一、)

一九〇三年、余は琿春に赴き、暫らく滞在し、一九〇八年には黒龍江右岸愛琿附近(Odro toksso Coulou souwajan toksso, Kouhouché lamoun toksso (自著「アムル、スンガリ地方」參照)を跋渉し(アムル中流左岸の地に、滿人、ダハル人の聚落の存せぬことは、バトカノフ氏の實査で明瞭になつた)又一九〇九年には

松花江の沿岸の Iachn, Sonson 三姓等を訪ひ、更に齊々哈爾に入り、附近の村落で調査を遂げ、嫩江岸では Yerenkali, tolso, Boten tolso、布特哈、墨爾

根を取調へ(亞細亞時報所載)嫩江沿岸、布特哈、墨爾根に就てを参照せよ)又同年の秋は、北京で色々調査した結果、滿洲語は、文語として廣がり、日用語として現在し、將來も生存し得べき證據となるべき歌謠、誕生、結婚、埋葬に關する習慣、日用文、上書、村落事務に關する文書等を蒐集するを得た、(ルダコフ教授は、其の著「義和團」の第七一頁に光緒二十三年、齊々哈爾駐在、長春管區財務官報告の譯文を掲げたが、同書に曰く、「呼蘭地方の大小官吏、漢語を解せず、されば、支那政府よりする諸布達は、盡く漢文なるにより、布令到達する毎に、苟も漢字を解する官吏をして、文意を滿洲語に通譯せしむ、之を以て往々布達の實行に際して、其の當を得ざるあり、今後重大なる布令は、滿洲語に反譯して發布

せらるべし云々と、此、明らかに滿人の支那語を解せざるの事實を表白するものにして、滿語の譯文添附を請ひしは、誠に已むを得ざるの事となす。

滿洲語は、先頃來滿人自身及び支那人の間に研究せらるゝこととなつて來たが、日清戰爭後は、政治家間に滿洲事物排斥があつて、滿洲といへばすべて排斥されてゐたが、西太后垂簾時代には、一時其の勢力を挽回し、今日では再び悲運に向いてゐる様であるから、近く十年十五年の間には、嘗て存在した様な官立の學校で、滿洲語を習はせる事は難いばかりでなく、私立學校の設立すら、覺えない様であり、又自分の得た結果では、滿洲語を讀み書きするものは、二三十歳以上の者のみであつた。

此等の事情を綜合すると、滿洲語を話し、滿文を解するものは、必然少數になつて仕舞ふ事は、あり得る事と考ふる。

然るに近ころ滿語の教授所か續々として起りつゝ、

あることは、極めて注意すべき事と信ずる、之は各村落を始め、北京に至るまで、多数の學校が設立せられたつゝあつて(大部は私立學校であるが)愛琿、齊々哈爾、墨爾根、布特哈、及び北京などには滿蒙文高等學堂を置き、海拉兒、三姓、吉林には、將に設立せんとしつゝある、此諸校では、教授細目中に滿洲語の俗語文語を置き、又各自の土俗語を教える豫定である、即ちソロン語は、海拉兒、及び嫩江の右岸にある Hiau Chihkei 村の學校に於て、ダフル語は、海拉兒、齊々哈爾及び Yemetchi 村で、オロチョン語は、ロシア領のポヤルコフ要塞に對する地點に設けられた學校で、教授さるゝ筈である。

かゝる學校が出来れば、新に教科書を出版することになるし、北京の滿蒙文高等學堂は、滿洲語教授の模範を示す事になり、此處で發行される書籍は新設諸學校の教科書となるであらう。

かく、滿洲語教授處の起つた事は、一面には滿人

が、今後新生涯に入る階梯となるのであり、一面には滿人が、其の國語を完全に習得するを得ることとなり、従つて滿洲語の文學は今後新しい方面に發展することとなるであらう。

て、滿洲語で書かれた書籍の解題は、近々「支那に於ける滿洲語研究の現状」と題する論文にて發表する豫定で、目下は、余が研究した文献の事に就いて諸方の御批評を得たいと考ふる。

滿洲には、其の土地の状況と同様、文學にも南北の區別があつて、琿春から、吉林長春(寬城子)、及び海拉兒を結びつけた一線が、其の境界である。

東三省に於ける漢人と滿人との人口の比例は、盛京省では、住民十人に漢人九人、吉林省では、七八人、黑龍江省では、六一七人といふ大數であるから、滿人の分子は、北方に至るに従つて増加する。

さて、とれほど人口があるかといふと、露文には數字を示してゐるものがないが、日本參謀本部出版

の滿洲地誌によると、千三百萬といふことだから、一九〇七年より一九〇八年にわたる新移住者の數を百万とし、奉天省には八百万、吉林省には三百五十万、黒龍江省には五十万の漢人が居るから、漢人及び其の同族の數は約二百万である、して下に擧ぐる諸族の數を差引き、百八十万が滿人の大數である。

- 一、東干人 十二万
- 二、瓦爾喀人 二万
- 三、索倫人 三万
- 四、鄂魯人 一万
- 五、瑪涅克爾人 八千
- 六、達瑚爾人 五千
- 七、費牙喀人 五千
- 八、滿琿人 二千
- 計 二十万

(達瑚爾人は約一万五千とするを妥當と考ふる、蓋し嫩江の流域に居るもの約一萬なれば、海拉兒、齊

齊哈爾、愛琿及び松花江沿岸の居住者を之に加ふる)と其の數が増加するからである。

漢族文化の影響は人口の密度と同様、此等數字の示す通り、南方より北方若くは東北方に至るに従つて著しく減ずる。

滿人の住居する南滿洲で、支那の勢力は非常なもので、遼東の習俗は「漢人、滿人何等の區別なし」といふことで、自分は研究上、愛琿、墨爾根、布特哈、齊々哈爾を撰んだ理由も畢竟は此に存するのである、して愛琿附近の人民は、一九〇〇年より一九〇一年にわたる露清間の交戰的關係の影響を甚だしく蒙つてゐる。

ブラゴウエシチェンスク附近に居た滿人は、戰塵を望むと深く省の南部に遁逃し、貴重な書物の事なんかは、頓著しなかつた、全體愛琿は、黒龍江省の省城で、附近には多くの滿人が居り、城は要鎮であつたのだが、ロシア人の爲めに焼き亡ぼされ、記録書

類なんかは、滅茶苦茶にされ、自分が旅行して「何か満洲文の書物は持つてゐないか」と尋ねても、異口同音「皆焼けて了つた」と返答する、して此が真正の事實であるのは慘の極といふべきである。

満洲の文獻ばかりでなく、之を所有する人間を發見することすら困難である、其の事情の一端を述べると、文獻を所有し相な人々は多く村落に散在し、愛琿の官憲大部は滿人て、文獻を所持するものは、多く之を其の郷里に置く、蓋し公私の満洲文獻を手にする、漢人から輕侮される傾向があり、之を讀み書きすると面白くなさ結果を生ずるからである。

所が、ダフル人の滿語の文獻に對する態度は滿人とは正反對で、此附近で、其一二を擧げると愛琿の南六露里にある滾必兒口子、同く十六露里南方黑龍江流域の富拉兒吉等）多くの満洲文獻が保存されてゐる。

之を要するに、愛琿附近は、文獻に乏しく、其の

様式も極めて變化に乏しい、であるが、多少興味を持つて研究せらるべきものもある、して書物の全部が、寫本で一冊も印刷書はなかつた、また二三のもの、特に *Outokou i bitche* は貴重なる書物たるによつて、轉讀轉寫等のため著しく手すれてゐた。

此等の書物を分類すると、

一、宗教的經典若くは教訓書

二、歴史、物語類

三、歴史的人情的歌謠

に分るゝと考ふる。

第一類には、*Nisan saman* の書を先づ擧げねばなるまい、此著者は不明だが、シヤマン教の宗教的根據、殊に其の儀式を明白に書いてある、教訓的古傳として、最も貴重すべきものと信ずる、此寫本は極めて稀で、北満洲では、村落居住の滿人のみならず、ソロン人、ダフル人なども好んで讀み、所謂語り次ぎ言ひつぎもちて、黑龍江省、吉林省の北部の

幾萬の人心に、深く記憶されてゐる。此話の大意は、或富有な夫婦が居た、齡既に知命に達して、*Son-tai Fiangou* (スルダイは賢、フィチアングは末子) が生れた、此子供を「珠の様に」大事に育てあげたが、其の十三の時、召使二人をつけて狩に出した、召使は此子供と協力して、弓で、前を通つた兎を射止めた、其の後此兒が突然死んだ、それで召使等は此兒の遺骸を、慟哭する兩親の許に持ち歸つた、(此から色々兩親の所作、死人に對する禮式などの事が書いてある)其の後に突然見ず知らずの男が來て、其が教えたものだから、兩親は、惡魔にさらはれた子供の靈魂を呼び戻す事も出來様かると、召使に言付けてシヤマンをながませた、此僕等は、*Nishoha* (ニシハ) 河の畔で、シヤマンを探し出した、シヤマンは呪文を唱えた後に、天に禱の祭文を述べ、其の弟子と、死んだ兒の身體に向ひ、種々シヤマンの儀式をしたり、歌を詠ふたりして、

遂に其のシヤマンが黄泉の國に浮んで行つて、其處に死んだ兒の靈魂を見出した、シヤマンは子供の爲めに神から長命、諸福を強請し、其の靈魂と共に此地に降りて來る……

といふのである、此書は寫本で、西洋紙四ツ折大で壹帖にも二帖にもなつて、愛琿地方の滿人ダフル人の間に傳はつてゐる、して此等の村落は、附近のシヤマン教の根據といふべき地である。

第二類には、

- (一) *Kouwang je Sheng ni bit-che* (*Tionroun i bit-che* 國の書の中) 五帖
- (二) *Soung Goumou i baita* 宋國の書、大本三帖
- (三) *Tieison Tieson sain bie Kitahiboune* 智德説
- (四) *Takaliboune chesei bit-che shontoucthiu* 脩身經注説、壹帖
- (五)

(六) 潘氏説論、壹帖

(七) Ama emei bali 親天地君：恩記十八章、壹帖

第三類には、

古英雄詩 [Isongei endonringe outeloun i bitche

壹帖三句であるが、諸書は滿洲語のみて記され、愛琿道台管下の北、及び東北部の住民間に行はるゝ文學的作物である。

此等の書物は、從來、前述の傾向及學校新設の爲めなどの結果世に弘布せらるゝ事と信ずるが、英文にて世に現はれてゐる「滿洲書目」の中には、まだ擧げられて居らぬ。(第二のものは、メルレンドルフ第一二五に擧つてゐる) 此英文の書目には、八十四種の書籍を擧げたばかりで、又彼の有益なる論文「滿洲文學論」P. G. Mollendorf, Essay on Manchur Literature には、二四九種の滿洲文獻に就いて解題してあるが、前掲の書は見當らなす。

愛琿の西南、墨爾根地方(嫩江府)布特哈(布西廳)

及び齊々哈爾(龍江府)地方では嫩江の中流(墨爾根より齊々哈爾に至る間)地方に散在する村落で、多くの文獻を得た、して其の燒點は、墨爾根及び其の附近の村落で其の一二を擧げると、化搭奇(メルゲンより西北十露里)業克得(三十一露里)哈達彥(東北十二露里半)伯火頭(四露里)羅々河屯(東南三十二露里半)及び其他(自著)嫩江沿岸、布特哈、墨爾根に就てを参照せよ)である、して墨爾根には、あまり多く滿人は居らぬから、村落が重要な地點となる、村人が余に云ふ所では、シヤマンが此處に居て、*san i bitche* を得られるといふ事であつた、して、文獻の状態は、愛琿の状況と大差なしてある。

布特哈地方は、最も完全に又多方面に滿人の精神を窺ひ得る地點で、滿洲語の俗語及び文語を解する者は、滿人のみてなく、ソロンにもダフルにもある。

此地方の滿人の村落を擧げると、Ivotchi tokso (又 Wangi Bout-ohu-*ウシ*、嫩江の右岸) Bout-ohu Bordo

より西三十五露里)Tan Chibekhi(西より嫩江に注ぐ支流域にあり)等てダフル人の居所はShritsing(嫩江の東岸支流にとへる地點にして、Boutahn bordoより西三十露里にあり)Nagi(嫩江の右岸)等て、ソロン人の居住地點は、嫩江の右支流 Nonin biru 河の支流附近の村落 Chozia tokso, Olomerde, Jarise, Ilhengde, Naktia 等である。

此處では、前に發見せし諸書の外、多くの滿洲書を見た、其の品類は、

一、宗教的教訓的作品

- (イ) 關帝書 滿文寫本壹帖
 - (ロ) 二十四孝子歌 寫本壹帖
 - (ハ) Gao-wan gouan shi in poussa 滿文寫本壹帖
 - (ニ) 四本簡要 滿文寫本四帖(メルレンドルフ)
 - (九八) 九八)
- 二、歴史物語類
- (イ) 隣邦史 滿文寫本

批評及び紹介

- (ロ) 萬國誌 同上
 - (ハ) Gen sijang tung ni bit-che 滿文寫本三帖
 - (ニ) Fei lung tsi tsounwan i bit-che 寫本五帖
 - (ホ) Joni loun tsi tsounwan i bit-che. 寫本壹帖
- 三、物語平山冷燕(センジュリアン氏フランス譯一八六〇年パリ出版、メルレンドルフ氏第二四八號)滿文寫本八帖

齊々哈爾及び其の四周地方には、寫本と同時に少數ながら、版本を發見し、内容から見ても、前述の諸書とは、性質を異にせるものがあつて、前述のの缺けたるを補ふことが出來た、乃ち、

- (一) 字書
 - (二) 滿洲語階梯
 - (三) 歴史に關する著述
 - (四) 教訓書及宗教的儀禮書
 - (五) 歌謠及び物語
- である、

一體清朝文學の根本となつたものは前述諸地方の村落を踏査した結果で見ると單に滿洲種族からばかり出てゐるのでなく、ダフル、ソロン、ゴールド、オロチョンよりも出てゐる（ゴールドとオロチョンの事は、三姓に來てゐた商人に就き自分が取調べたのである）ものであり、又滿洲文獻の大部分は、世間から想像されてゐる様に市府に存在してゐるのではなくて、村落にあるものであることを實地研究で明らかにした。

すべて此等の地方で發見した書物は、盡く官吏の所有品で、他方では一本も見當らず、メルゲンとブトハには、一九〇九年には一軒の本屋もなし、愛琿には小さなシナ書店があるのみであつた。

齊々哈爾は、黒龍江省中最大の都會で、三四軒書店があるが、一冊も滿洲文の本はない、それで、個人からでなくては、一冊の滿文書も手に入らぬ事とかる、してシナ人の勢力が増加するに従つて滿文の書籍も、北方に逐ひのけられる、唯此間に意を強く

するのは、到る所に學校の設けらるゝ事と、今日では尙滿人の間に遺書が、澤山保存せられ居る事とて、滿洲語、滿洲文學を保存するものは、此二つの外になら。

齊々哈爾には、滿洲文獻の保存地が數ある中に、ダフルの居る村落は、達响兒屯（チチハルの南八露里）Bazichar daehour toksó（チチハルより西嫩江右岸）Miansou（チチハルの西十五露里）嫩江右岸より六露里 Tsiokar tosko（齊々哈爾より西北八露里）Charatoun（齊々哈爾より十八露里）嫩江の上流にあり、Onor toum（嫩江の沿岸チチハルより三十一露里）Tsoursen toksó, Erentohi toksó 等てあり滿洲族の村落は、大門屯（Amba douka toksó 齊々哈爾より西南九露里）四家屯（Doun boo toksó 齊々哈爾の西南六露里）（臥牛圖（Onoto toksó 齊々哈爾の北）大馬蹄崗子小馬蹄崗子、庫庫羅爾（チチハルの西方にありて、三村あり）札蘭屯（チチハルの西方）等てある。

自分の齊々哈爾及び其の四近で得た書籍は次の如くである(「嫩江沿岸、布特哈、墨爾根に就て」參照)

- (一九) 康熙字典、漢滿對譯、オクタボ形七、八冊、寫本
- (一〇) 繙譯類編、漢滿對譯熟語、オクタボ形四冊
- (二) 千字文 壹冊寫本
- (三) 滿漢對話 寫本壹帖
- (八三) 鋒鏗春秋 壹帖寫本
- (一四) Tsan zui mei oulahun bit-che 寫本
- (一五) Chouwa gongang so bao san njan bit-che 四冊寫本
- (六) Zoon sijang go i bit-che 二冊寫本
- (七) Gao tsoung goni i bit-che 二冊寫本
- (八) 西遊記唐僧取經 五冊寫本
- (九) Chowa mouluwan i bit-che 十一冊寫本
- (一〇) 聖教 壹冊

批評及び紹介

- (三) Nizan saman i bit-che 壹冊寫本
 - (三) 聖諭廣訓 壹帖
 - (三) 智德説(前掲第四號書の條參照)寫本
 - (四) Ontohou i bit-che 詩集壹冊 三詩を收む
 - (一) 椋鳥と蛙の會話、^ロGoung jan tohang 湖畔にて燕と鶯の會話、^ハ小兒 Coiantao
 - (五) Igehou i gison 詩集 滿文寫本壹帖
- 下に掲ぐる書籍(滿文寫本)は、自分は、一つの下に入れ様と考へる、蓋し其の内容(一)シヤマン教の特色をそなへ居ること、(二)シヤマン教に必須の知識を含み、滿人、ソロン人、オロチャン人の村落にあるものは、精神的肉體的疾患ある際は、此書の所記通りにして其の災を免れつゝあるからである。
- (一) 供物捧呈に際し、吉凶判断書
 - (二) 人間出生の際に受けたる運命壽命若くは運り合せを知らんとするものゝ書
 - (三) 居處卜占書

(四) 壽命幸福計算書

(五) 大事所置に際する星の廻り合せ壹覽表 (本書には表題なく、直ちに好運の星及星座 (Tokton-tou sain onseicha) を記す、

(六) 冥道、善惡十神戒律書

(七) 運命早見書 (人間の運命、手、指判断) 寫本

(八) 滿文曆本 寫本

(九) 對句歌、其第壹句に 百拜歌とあり、
(滿洲採訪記事終)

明治四十三年十一月 (堀 竹雄抄譯)

音譯符備考

譯文所用の cu はフ、tau チウ、ou ヲ 代用とす、